慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	A・リブキン著『アフリカの登場と世界』
Sub Title	Arnold Rivkin : The African presence in world affairs
Author	小田, 英郎(Oda, Hideo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1964
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.37, No.6 (1964. 6) ,p.106- 110
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19640615-0106

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Arnold Rivkin:

The African Presence in World Affairs

National Development and Its Role in Foreign Policy

The Free Press of Glencoe, Collier-Macmillan Limited, London, 1963, xiv＋304 pp.

A・リブキン著

『アフリカの登場と世界』

一　本書は、アフリカの内部的な政治・経済の発展が、アフリカ

の対外態度にどういう影響をあたえ、さらにそれが世界問題におけるアフリカの役割にどう作用するか、というテーマを追求した労作である。近年、アフリカに関する文献の数は増加の一途をたどっているが、国際関係のなかでアフリカを位置づけようとする試みは、依然として数すくない。最近のものとしては、Vernon McKay, Africa in World Politics, Harper & Row, 1963 を挙げうるが、それも著者みずからが語っているように「基本的にはナラティーヴ」(vii頁)であつて、特定の問題意識をもつて対象に接近したものではない。それに対比させてみれば、ここに紹介するリブキンの「アフリカの登場と世界」は、アフリカの内的発展と国際関係との相関性を構造的に把握しようとするその基本的姿勢において、ヨリ高度のものと考えられてよいであろう。すなわち著者は本書について、「これは、サハラ以南のアフリカにおける政治的・経済的変化の諸プロセスを叙述し、分析し、そしてそれら諸プロセスの相互関係を明らかにし、新生アフリカ諸国の内的ダイナミックスとそれら諸国の国際社会における行動の関連性を捕捉し、最後に、合衆国ならびに西欧諸国の外交政策に関して、新生アフリカ諸国の対内的、対外的行動の意味を斟酌しようとする試みである」(xi頁)と述べているのである。後述するようにこうした試みは必ずしも十分な成果をともなつてはいないが、それにもかかわらずここに本書を紹介するのは、叙上の理由によつて、本書が注目すべきものをもつていると考えたからにほかならない。

著者リブキンは、現在、世界銀行でアフリカ関係の経済顧問をつとめているが、一九五六年から数年間、マサチュセッツ工科大学国際研究センターの招きで同研究センターのアフリカ経済政治開発計画に参加した経験ももつている。本書は、その当時の研究の成果である。なお本書以外の主要著書としては、Africa and the West: Element of Free-World Policy, Thames and Hudson, London, 1962 がある。

本書は四部十三章からなつているが、紹介にさきだつて、その内容を目次で示せば以下の如くである。

第一部　序論　諸概念と課題
　第一章　アフリカ登場の多元性
　第二章　アフリカ発展の連鎖　成長と安定
第二部　成長の諸問題
　第三章　成長のモデルの選択
　第四章　農業の近代化
　第五章　公共部門・私的部門のアフリカ化
　第六章　教育の促進
　第七章　福祉国家概念の役割
第三部　安定の追求
　第八章　国家構造と政治体制
　第九章　安定の焦点　ナショナリズム、パン・アフリカニズム、ユーロアフリカニズム
　第十章　アフリカ中立主義
第四部　アフリカの登場と世界

第十一章　アフリカの登場と世界平和
第十二章　世界のバランス・オブ・パワー
第十三章　発展の十年

このほか巻末に、一九六三年三月三十一日現在の独立アフリカ諸国について、その面積、人口、独立年月日、政治形態その他、および国際組織・ブロックへの加盟状況などが一覧表のかたちで提示されている。それでは以下簡単に本書の内容を紹介しておこう。

二　第一部の冒頭で著者はまず、アフリカの世界への主体的な登場がいかに多元的な影響力をもつものであるかを明らかにする。すなわち著者によれば、アフリカの前進はまず第一に植民地主義の崩壊を必然的にもたらす（四―九頁）。さらにそれは世界の平和にも重大な影響をおよぼす。たとえば国家間の関係においては国境紛争の芽を多くもつているし、国内的にもコンゴ問題のように世界的な擾乱をうみだす要因をかかえているという具合である（一二―三頁）。第三にアフリカ諸国が急速な経済発展を要求するために世界的な援助競争がその度をつよめていく（一三―四頁）等々。こうした指摘はいわば常識的である。重要なのは、「国家建設、ネイションの建設、経済建設、技術革命が相互に作用しあい、そして……これらの問題の総体およびこれらの問題の解決のされ方が相互に作用しあつて、新生諸国の対外姿勢全体を形成するのに役立つている」（一九頁）という認識であろう。こうした認識は、「アフリカでは国内問題の多くが容易に対外政策と融合する傾向をもつている」（一九頁）という認識へと発展する。ところで、アフリカの発展に焦点をあわせる場合、国内問題は「経済成長の問題」と「政治的安定の問題」に二分されるが、著者によれば、この成長と安定のいずれにプライオリテイをあたえるかによつて異つたタイプの国へ発展する。すなわち経済成長の潜在力を認識している指導者は内的成長を第一義的なものとし、そのうえに安定をきずこうとする（たとえばナイジェリア）。これに対して、たとえばガーナ、ギニアのように国家の集団化に安定の源泉をみいだそうとする国は、外向的姿勢をとりつつ成長を安定に従属させようとするのである（一二―三頁）。以上のほか、第一部では経済成長のモデル選択の問題、政治的安定をめぐる諸問題など、本書のなかで考察されるべきいくつかの項目が提示されている。

第二部は「成長の諸問題」がとりあげられるが、その第一は成長モデルの選択である。しかし成長モデルの選択といつても、「資本主義か非資本主義か？」といつた体制的な選択ではなく、「公共部門の比重をどのくらいにするか、私的部門の活動をどのていど認めるか？」という量的な選択が問題となるのである（三五頁）。アフリカの場合、一般に植民地主義がのこしたものを新生諸国が継承したうえに、もともと土着の資本家が圧倒的に欠如しているため、公共部門の比重が極度に大きい（三七頁）。くわえて急速な近代化への要請もあつて、この傾向はますます強化される方向に向つている（三九頁以下）。著者は、一方の極に公共部門に力点をおく左翼権威主義的諸国（ガーナ、ギニア、アラブ連合）を、他方の極にかなり大きな私的部門をもつ民主主義的傾向をもつナイジェリア連邦をおき、そ

の中間にいくつものバリエーションがあると指摘している。第二の問題は農業の近代化である。アフリカにおける農業の重要性について著者は、たとえば鉱物資源のもつとも豊かな旧ベルギー領コンゴにおいてさえも農業の重要度は第一番目に位すると説明しつつ（四八―九頁）、農業近代化の焦点は生産を増加させること、および生産物を貨幣経済の内部へひきいれることであると指摘している（五二頁）。このほか国内市場の育成、第二次および第三次産業の育成が農業近代化を間接的に助長するが、その場合、農業労働人口の不足といった問題が起る可能性もある（六一頁以下）。さらに教育の問題に関しては、各国に教育普及の意志はあつても、資金面で無理だということ、また初等教育に力を入れすぎると中等、高等教育との間にギャップがひろがつてしまうということ、および教育制度ばかり拡大しても教育を受けた人々を吸収しうるだけの巨大な経済を用意してなければ、結局政治的安定を脅す原因をつくるばかりであるということ、などが指摘されている（一一五―六頁）。

第三部は「安定の追求」といつた問題である。ここでいう安定とはむろん政治的安定である。アフリカ諸国のように分裂的要因を多くかかえた国では、中央集権的な統一が安定の前提条件とならざるをえない。そうした特殊性を反映して、アフリカでは、たとえばその国家構造は Unitary System が圧倒的に多く、Federal System といえばナイジェリアぐらいのものである。またアフリカの場合、大統領制が多いことも、安定の追求が政治構造に反映している好例である。同様にして、政治体制にしても権威主義的な一党制が多くみられる（一四二頁）。ガーナ、ギニアのような左翼的権威主義体制の場合、その特徴は政府の機関およびコミュニケーション・チャンネルを独占する一党体制、ならびに国家に対する党の優位という点にあり、右翼的権威主義体制の場合もイデオロギー的色彩がヨリうすいほかはだいたい同様の特徴をもつている（一四二―八頁）。要するに、アフリカの指導者の間には、左右いずれにせよ強力な一党制をつくりだそうとするところの、Unitary System をともなう権威主義的政治体制への選好性がつよいのである（一四九頁）。数すくない民主的体制をもつた国としては、ナイジェリアとシエラ・レオネを挙げることができる（一五〇―一頁）。また権威主義的複数政党制国家は旧仏領諸国に多いが、それも一党制へ変化する傾向をみせはじめている（一五三頁）。ところでこれらアフリカ諸国は安定をどのようなイデオロギー、運動のうえに基礎づけようとしているであろうか。一般的にいつて左翼的権威主義諸国ならばパン・アフリカニズムに、旧仏領諸国はユーロアフリカニズムに、それぞれ安定の基礎をおいているようである（一五九頁以下）。ユーロアフリカニズムとはいうまでもなくヨーロッパ旧植民地本国との協調を基調とするものであるが、英連邦、フランス共同体を通じての連繋よりも、EEC の枠内での連繋の方がヨリ多くの実績をあげている（一七〇―一頁）。以下、アフリカ中立主義と国連について簡単な叙述があるが、ここでは「中立主義もまた安定追求への国内的努力と密接に関連している」（一九二頁）という言葉を引用するにとどめておく。

第四部は「アフリカの登場と世界」という題で、いわば本書の結

論にあたる部分を構成しているわけであるが、平和の問題、世界のバランス・オブ・パワーの問題等は第一部での叙述を敷衍したにすぎず、また合衆国および西欧諸国の対アフリカ政策についても、とくに漸新な提案をしているとは思われないので省略する。

三　本書の概要は以上の如くであるが、ここに若干の読後感をつけくわえて、本稿の結びとしたい。まず第一に感じたことは、成長と安定という二つの概念を用いて論点をたくみに整理したということである。そのために広範な政治、経済の問題を比較的容易に捕捉することが可能となつた。しかし、それにもかかわらず、著者の意図した、アフリカの内的発展と国際関係との相関性の把握が、極めて漠然としたかたちでしかおこなわれなかつたのは遺憾であつた。本書の主たる狙いの一つがそこにあつたとすれば、本書は前述の如くその着眼においてみるべきものをもつていたにもかかわらず、その結果において取るべきものをもちえなかつた、とされうるであろう。つぎにいささか疑問とされるのは、著者がイデオロギーの問題を無視ないし軽視していることである。一般に後進国の近代化過程においてはイデオロギーが先行し、近代化の方向づけをおこなう傾向がつよいように思われるが、その点著者は、たとえば成長モデル選択に関して資本主義・社会主義といつた類別法を一切排し、公共部門・私的部門といつた没イデオロギー的範疇を使用するにとどめている。また、パン・アフリカニズム、ユーロアフリカニズムについても、それへの選好をまつたく没イデオロギー的側面からのみみているのである。そうした点に多少の疑問と不満とを禁じえないが、それにしても、本書のなかに示されたアフリカ問題への接近方法は示唆的なものをもつており、またその文献的稀少性ともからんで、本書は十分にその存在理由をもちうると思われる。

（小田英郎）